

唐津焼

中野窯

作家紹介

五代 中野陶痴 昭和二十二年生 平成二十六年、陶痴襲名

三代 中野霓林 昭和二十五年生 平成二十六年、霓林襲名

政之 昭和五十四年生 陶痴の次男

「一、楽 二、萩 三、唐津」

唐津焼は、李氏朝鮮（一説に、華南）から伝わったとされる技法が今も根付いています。特に蹴ロクロ、叩き作りといった技法は古唐津から伝わる技法で、現在もこの製法を行います。焼成の窯は連房式登窯（れんぼうしきのぼりがま）という大がかりな窯を用い、そこで一三〇〇度の高温で一気に焼き締め、意匠は茶器として名声を馳せただけあって、非常に素朴で、それだけでなく独特の渋みがある陶器です。

唐津焼としての中野窯の存在は、徳川末期及び明治維新と共に、御茶碗窯として炎を絶やすことなく、今日の唐津焼隆盛の基礎をなしました。

安政年間の中興の祖としての功労者、初代 松島弥五郎、次代 中野霓林時代を経て、霓林（二世）となり没後、中野陶痴の時代を経て、五代、陶痴（長男 一政）、三代、霓林（次男 正道）、陶痴の次男 政之の現代へと継承されました。

中野窯の作品には、旧唐津藩主六代 小笠原公の認可指定により、御用窯としての三階菱の窯印があります。